

【絵本の読み聞かせ】

◇ 幼稚園教育要領(平成20年 3月)

第2章 ねらい及び内容

言葉の獲得に関する領域「言葉」

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

[内容の取扱い]

- (3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりする楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージを持ち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。

1 絵本とは 絵本から 絵本で

〔松居直さんの『わたしの絵本論』（国土社）・「絵本の与え方」（福音館書店）から〕

- 絵本は、大人が子どもに読んであげる本である。
- 幼児が絵本の世界へ入る前に、まず子どもに語りかけ、歌いかけることから始めよう。
- 選り抜かれ、芸術家の豊かな感性や理性で組み立てられ、整えられた言葉が、絵本の中には込められている。
- 語り聞かせることは、言葉の種を一粒一粒とまくことである。
- 素直に、心を込めて、繰り返し読む。
- 絵本を仲立ちにして心が通い合う。
- 子どもは、まず絵を読む。
- おもしろい本が子どもの周辺にあって、自由に読書が楽しめること。大人も一緒に読書を楽しむ雰囲気、何よりもよい読書指導である。
- 絵本は読みっぱなしでよい

<赤ちゃん>

- ・ 様々な「ものの絵本」・遊びを楽しむ絵本
- ・ 音の響きを楽しむ・言葉を聞く楽しさから物語絵本へ

<2・3歳児>

- ・ 子どもの日常に添った絵本
- ・ 繰り返しが大切な昔話絵本
- ・ 見た目でない

<4歳児>

- ・ 想像力の育つ絵本を豊かな想像力から知識の本や科学絵本へ

<5・6歳児>

- ・ 夢中になれる一冊の絵本を見付ける
- ・ 長い童話も読んであげる
- ・ 科学の本も楽しさと遊びが大切

2 幼児の絵本の読みの構造

- (1) 絵を読む
- (2) 読み手の表情を読む
- (3) 言葉を読む
- (4) 読み手の心を読む
- (5) 自分の中に発達を読む

3 読み聞かせの意義

- (1) 「話し言葉」と「書き言葉」の世界を橋渡しするものとして、教師の読み聞かせは重要である。「生活の言語化」と「言語の生活化」を媒介する教師の役割は重要である。
- (2) 教師や友達と共に様々な絵本や物語、紙芝居などに親しむ中で、幼児は新たな世界に興味や関心を広げていく。
- (3) 様々なことを想像する楽しさと出会ったり、様々な気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知る機会ともなる。
- (4) 絵本や物語などの読み聞かせを通して、幼児と教師との心の交流が図られ、特別に親しみを感ずる。
- (5) 一人一人が絵本や物語の世界に浸り込めるように、落ち着いた雰囲気をつくり出していくことが大切である。

4 読み聞かせのポイント (松岡享子氏による)

- (1) 読み聞かせに合った本
 - ① 絵本の大きさ
 - ・ ある程度の大きさ
 - ② 絵がよく見えること
 - ・ グループの前で読む場合：離れたところから見て確かめる
 - ③ 絵と文の割合
 - ・ 一場面に対する文の量は、なるべく少なく、話についていく子どもの心の動きと、場面の变化のペースが合うことが望ましい。
 - ④ 場面割り
 - ・ お話の進み具合と、絵の場面数の割合も大切である。
 - ・ 物語の進路にそった場面割りがされていることが望ましい。
 - ⑤ 見開きに一場面
 - ・ 絵を見せて読むのに好都合
- (2) 上手な読み方
 - ① 安定した持ち方
 - ・ どの子にも見えるように、ぐらつかないようにする。
 - ② 開きぐせをつける
 - ③ めくり方
 - ・ 手を絵本の上から下へかけるようにして、腕で画面を隠さないように気を付ける。
 - ④ 読む程度、めくる速度
 - ・ 絵を見る時間を与えることも考える。
 - ⑤ めくった瞬間は読まない
 - ・ 新しい場面が現れた時は、子どもの注意は絵に集中する。
 - ⑥ 絵と文の調整
 - ・ 絵と文の組み合わせがうまくいってない場合は、読み手で適当に調整する。
 - ⑦ ゆっくりと心をこめて
 - ・ 自然に読むこと
 - ・ 読み手がその絵本を楽しむ